

中国に根づいた仏教
——道綽浄土教——

佐藤 健

ただいま、学部長さんから、たいへん丁寧に紹介いただきまして、ありがとうございます。

私はずっと若い若いと、まだ若いつもりでいたんですけども、気が付いたらこんな歳になってしまいました。これといった業績もなく、ただいたずらに歳を重ねたという感じがいたします。

今日はここに来る前に比叡山を見ますと、比叡山にうっすらと雪がかかっておりまして、「今日は冷え込みもきついんやな」とそういう思いをしたわけでございます。

こうして、寒い中をたくさんの方にお集まりいただきました。充分なお話もできないと思いますけれども、お聞き取りいただければありがたいです。

みなさまに、レジュメを配布させていただいておりますので、それに従いまして時間の範囲でお話をさせていただきますと思います。

「中国に根づいた仏教」ということで、私は道綽浄土教の研究をずっとさせていただきましたので、その一端を今日お話ししたいと思います。

さきほどご紹介いただきましたけれども、私が道綽の浄土教を研究するにいたりましたのは、大学院に入った時です。それは一九六八年ですが、藤堂恭俊先生から「道綽禪師の浄土教をしたらどうか」とお勧めをいただきました。それはなぜかと申しますと、ご承知のように、佛敎大学には千賀眞順という先生がおられました。私の恩師でございますが、その先生が『国訳一切経』の『安樂集』の注釈をしておられました。藤堂先生はもちろん『論註』の権威でございます。また『国訳』の『論註』の詳細な注釈もなさっておられます。そのお勧めがあつて道綽にとりかかったのが、道綽の研究の始まりで、それから四〇年ぐらいいなると思ふんですけれども、これといった業績もあげずに、本当に藤堂先生には申し訳ないという気持ちで一杯でございます。しかし道綽に対する思いは、誰にも負けないくらい持っているつもりで、まだまだこれから許される限り、研究を続けさせていたいただきたいと思つていきます。

私は最初佛敎大学の仏敎文化研究所にいました。その時に牧田諦亮先生のご厚意によりまして、京大の人文研に一年間、研修の機会を与えていただきました。牧田先生には『疑経研究』という書物がございます。『安樂集』の中にも沢山の疑経が引用されていまして、私も『安樂集』と疑経」という論文を書いています。後でご紹介申上げますが、本日は特に『安樂集』の中に引用されております『五王経』というお経についてお話しさせていただきますたいと考えています。牧田先生には「真経と偽経——浄度三昧経」と『五王経』について」という論文がございます。そこに私が仏敎文化研究所の時に口頭で発表させていただいた、『五王経』と中国古典との関連を先生

が論文にご紹介いただいております。そういうご縁もありまして、その一端をお話させていただきたいと思っております。

『安樂集』ですが、この『安樂集』という書物は、唐の初めの頃に、道綽という人が著された書物です。日本の浄土教にとっては、知らない人がないぐらい有名なものです。ところがこの書物は、唐の時代は受け継がれた痕跡がございしますが、次の時代から、長らく一千年間ぐらい、十九世紀ぐらいまで中国では恐らく散逸していたのではないかとされる書物です。南京に「金陵刻經所」を設立された楊仁山という方が、ロンドンに滞在中、日本の南条文雄の協力を得て、その当時、もう中国には残っていないなかった、浄土教典籍を集められました。その中に『安樂集』が入っております。ですから日本の浄土教にとっては考えられないことですが、中国では道綽、善導の浄土教が、早くして散逸していたと考えられます。そういうことから言いますと、講題の「中国に根づいた仏教」ということですが、それでは何が根づいたのか、ということにもなります。私なりにこのような題名を出させていただいたわけでございます。

この「疑經」ということは疑い、つまり「真經」としては疑いがあるということなんです。つまり翻訳經典ではないということなんです。「疑經」については、「失訳經典」、「偽經」ニセの經典とか、本物になぞらえた經典とか、いろいろな解釈がありますが、私は「中国撰述經典」と見るのが一番よいと考えます。中国でいろいろな經典が出来たという背景は、中国人が求めた仏教を反映するものであると言えます。「生きた仏教」、中国で生きた仏教の一端を明かす証拠ではないか、と考えております。

『安樂集』は、「浄土三部經」の教義内容を中心とするのですが、やはり「浄土三部經」の内容を理解するにあ

たつて、自分の血となり肉となる新たな解釈の方法を考案したのではないか。そこに、その時代、その時代において中国人が理解しようとした、受け取ろうとした仏教の一端が、こういった「疑経」という形で残されているのではないかと思えます。

しかし実際は、経録編纂者の意図によつて「翻訳經典」ではないという名のもとに、自然に消滅したものもありますし、また印刷の大蔵経から外されたものもあります。しかし敦煌などの辺境地において一部、残っている場合もあります。中原からは焼失しましたが、辺境の周辺部において残っている場合もあります。

『安樂集』に引用されている經典の中には、そういう痕跡。現在、散逸して残っていない經典、大蔵経には編入されていないけれども、用いられているものがいくつかあります。

『安樂集』自体を、また新たにそういう観点から研究することも、今後の課題になるのではないかと思つています。

たとえば、散逸してしまった經典の中で、道綽が引用しているものとしては、『惟無三昧経』とか『目連所問経』とか『法句経』などがあります。『安樂集』にだけ残存するものもあるわけで、そういうものをもう少し厳密に調査することが必要ではないかと思つています。

私は道綽の『安樂集』のキーワードを三つ挙げる事ができると思つています。それは、今ボードに書かせていただきました「勸信求往」「約時被機」「念仏三昧」です。一番目が「勸信求往」です。信を勧めて往をもとめしむ。極楽浄土の信仰を勧めて往生を求めしむという、その一点にあつたと思つています。『安樂集』の著作の目的は当時の

人々に丹念に浄土の信仰がいかに優れたものであるか、一人でも多くの人に知らせたいという熱意が生み出したのではないかと思えます。それから二番目は「約時被機」と申しますが、『安樂集』は時代というものの、今がどういう時代なのか、そしてその時代に生きる人々の素質、能力。それがどういふものであるか、時代というものとそしてその時代に生きる人々の能力とか素質、それとその教えというその三点が『安樂集』の基盤になっている。基本になっているように思います。

そして、道綽がいろんな經典や、論書を引用して述べる、その述べたいことは「念仏三昧」であった。「念仏三昧」という言葉の中に集約される実践であろうかと思えます。もちろんその「念仏三昧」の中には称名、名号を称える称名行も含まれております。日本で考えるような、そういう非常に洗練された考えではなくて、中国人が持っていた広い大らかな仏教に対する思いが、「勸信求往」それから「約時被機」「念仏三昧」に集約されるのではないかと考えます。

レジュメにしたがつてこれから説明を加えさせていたただきたいと思えます。大きく、道綽の事跡、どういう経路を辿られたかということ。それから道綽にとつてやはり浄土教の提唱ということが大きな功績であったと言えます。それから『安樂集』にはたくさんさんの經典が引用されておりますが、その中で特に疑經典、中国撰述經典ということですね。この疑經典というのは先程も申しましたように、真經に対して疑いがあるという經典で、それは翻訳經典であるのか翻訳經典でないのか、そういう観点から判定されたものです。しかし、考え方によればそれは中国人によつて作られた中国人のための仏教というふうにも解釈できます。それから、先ほどお話しさせて頂きましたように中国固有の思想というものが、疑經典の中には脈々と受け継がれています。その中国固有の思想との融合が、実際に中国人が受け取った仏教の実態ではないかというふうに思っております。

まずその道綽の事跡でございしますが、五六二年から六四五年、北齊武帝河清元年に生まれ、唐の太宗、貞觀一
 九年に没しています。并州、山西省汶水県の人です。伝記によりますと一四歳で出家し、『涅槃經』を二四回講義
 したと記されております。このことから涅槃宗、『涅槃經』の講説者であつたということがわかります。やがて北
 周武帝建徳六年、五七七年に北周によつて、道綽の生まれた北齊は併合されてしまふ訳です。道綽の生まれた所は
 北周と北齊の国境地帯とされます。そして武帝による廢仏毀釈が行われる。だから一旦出家した道綽はこの廢仏に
 よつて、余儀なく還俗されたとされます。廢仏というのは国家によつて仏教が弾圧されることです。經典が焼かれ
 たり、僧侶が俗人に還俗されるということです。そういうことが何度も中国では行われております。特に北周武帝
 の廢仏に遭遇しているということ。そして後に隋の文帝になつて仏教が復興される訳です。その時に再び、道綽は
 再出家をされたのではないかと思ひます。それから晩年にですね、慧瓚に師事し空理を学すと書いてありますが、
 これは慧瓚教団のことです。ひたすら頭陀行を実践し、真摯に積尊の時代の仏教に還ろうとする実践的な教団であ
 つたとされます。そこへ、一時身を置いておられた。それから、隋の煬帝の大業五年、六〇七年、道綽は四八歳の
 時に浄土教に帰入されます。それは曇鸞の浄土教を継承し、曇鸞・道綽・善導というのが中国における浄土の三祖
 とされますが、特に道綽は曇鸞の浄土教を非常に強く受け取られます。頻繁に『論註』、『讚阿弥陀仏偈』などを
 『安樂集』の中に用いておられます。

念仏三昧の実習により靈妙な浄土の世界が現出したと、道綽自身、念仏三昧によつてそういう体験をなさつてお
 られます。また、教化の中心、これはやはり玄中寺ですね、曇鸞の遺跡であります玄中寺を中心にその地域の人た
 ちに浄土の信仰を、いろんな方法を用ひまして、あるいはいろんな經典の教説を引っぱりながら浄土の信仰をお勧
 めになつたと思ひます。『般舟三昧經』に説く止觀や、『大方等陀羅尼經』にある坐禪三昧、また『觀經』の九品な

どの観法に励んだと考えられます。

『観經』の講義は二〇〇回にも及び、自身のより所とされたものです。広く念仏三昧の功德を讀えておられますが、なんと言つてもやはり『観經』を中心とする浄土教です。道綽の教えを聞く者は一斉に仏名を称え、念仏の聲が玄中寺に響き渡つたと伝えられています。念仏を称えるにあたり、麻豆を用いて念仏の励みとされました。麻豆とか小豆は山村地帯ですから、日常のものです。そういうものを念仏を数える手段としたということでございます。これなんかでもすね、一般の人々に単に南無阿弥陀仏と念仏を称えましようじゃなくって、実際に身近にある産物、麻の豆とか小豆を用いて、今日はどれだけ念仏を称えたという具体的な励みとして用いられたように思います。道綽の浄土教は、このような一般庶民を対象とする実践中心の仏教であつたのです。

著作としては、ご承知のように『安樂集』二巻がございます、上下二巻、十二大門から成つています。多くの経典や論書に説かれている「念仏三昧」の功德を懇切丁寧に明かされています。道綽自身も毎日、七万遍の念仏に励まれたということで、人に勧めるだけじゃなくて自ら念仏を実践されました。七万遍いうたらすごい数になる。法然上人も六万遍とか七万遍のお念仏をなさつたということですが、本当にそういう念仏三昧の生活をなさつたのではないかと思ひます。そして浄土の教えが、小さな子どもさんから、あるいは女性の方、そして一般の方々に、一挙に流行したと伝えられております。

臨終における曇鸞の出現というのは、これはある時、自分もぼつぼつ死ぬ時が近づいたと仰つた。そこで道綽を慕う村の人たちがたくさん玄中寺に集まつて来たのです。そうするとその時に曇鸞が雲の中に現れ、あなたの浄土堂はできてくるけど、まだやるべきことがあると仰つたという。この奇瑞が伝記に伝えられております。それから蓮華の華を採つてきて乾いた地面に挿したら、普通だつたら一日も二日もしないうちに枯れてしまうのに、七日間

枯れなかった。あるいは七〇歳になってから乳歯が新しく生えてきた。それからまた道綽の噂を聞いて、論争を挑んで来た人たちも、道綽の前に来ると、その靈氣に打たれて、論争するどころか、すぐすと帰っていった。こういった道綽自身が靈的な存在、宗教的な雰囲気を持つていたことが伝えられています。それがまた当時の人々の道綽に対する思いと申しますか、信仰を強く集めたのではないかと思います。八四歳でお亡くなりになるのですが、ご承知のように道宣の『統高僧伝』によりますと、八四歳でも氣力満々で、浄土の法門を人々に説くために活動しておられる、生存中の道綽像で結んでいます。道宣は現に生存して活躍している道綽のことを、本来ならば高僧伝ですから、お亡くなりになった方のすぐれた業績を讃えるというのが本来かもしれませんが、道綽の活動は道宣の頭から離れなかったとも考えられます。

道綽の事跡をかいつまんで申しますと、『涅槃經』の研究者、そして北周武帝の廢仏に遭遇、還俗して隋代になって再び出家。慧瓚教団への入門。これははつきりしませんが三十代から四十代ぐらいの時と推測されます。実践を中心とする、学問仏教ではなく実践を中心とする教団に入門されている。三階教を開かれた信行もこの教団への入門を希望したが、入門を断られたというエピソードもございます。慧瓚教団での実習を終えた後に『觀經』に巡り逢って浄土教に帰入されたという、道綽の生涯には三つの節目があると思います。事跡から考えられることは、北齊の貧農地方の人々の苦勞。洪水があつたり、干魘があつたり、イナゴの害により作物が取れなくて、食べるのに汲々とする人々の現実を、おそらく道綽は見られて、しかもまた北周武帝の廢仏によって母国が奪われ、出家、還俗、再出家という過酷な道綽自身の辿ってきた道が、阿弥陀仏の浄土によって救済されるという一筋の光となつたのではないかと思います。

次に浄土教の提唱というのは、『安樂集』の第三大門に、聖道の仏教と往生浄土という二つの勝れた教えを明さ

れ、現代、末法時においては、聖道を實踐しそれを達成することが困難であるとしておられます。その理由として現在は釈尊が入滅されてから非常に時間が経っている、具体的に申しますと、第四の五百年です。釈尊入滅後千五百年が経過した時代であると宣言されます。釈尊がおられる時であれば、この聖道の仏教も有効であったかもしれないけれど、正法の時代が過ぎ、像法の時代が終わり、今やもう末法の時代であるという深刻な認識です。仏教徒が慕う釈尊はるか千五百年前にお亡くなりになった。もういまこうなればこの浄土の法門しか私たちには残されていないという、そういう受取りでございます。釈尊が入滅されて実に遙遠であり、教理が深遠、奥深いにも拘わらず、それを理解する能力は現代のわれわれには残されていないという。先にお話ししました二番目の「約時被機」ということが明確に謳われております。正法・像法の時代であれば戒定慧の三学の実践も可能であったけれども、いま末法の時代においては、無始以来の自分の造った罪を懺悔し、そして仏名を称えて、ただ阿弥陀仏の大きな慈悲にすがって、阿弥陀仏の浄土に生まれさせていただくというより他に救われる道はないという、決断に立たれたのではないかと思います。

このように仏教を聖道・往生浄土という観点から二分し、往生浄土の法門を提唱したことは中国仏教史上注目されます。もちろん道綽さん以前から中国には浄土教はありました。しかし、このようにはつきりと仏教の中で、浄土教というものを明確に提唱した方は、やはり道綽ではないかと思えます。道綽には現代が末法であるという時代に対する認識が強いです。正法・像法の時代であれば、聖道を實踐することが可能であるが、末法時においては困難であるとする。曇鸞にも五濁悪世という時代に対する認識はございましたが、末法というすでに最終段階、末法の後に来るのは法滅の時代ということになりますから、仏教徒にとってはいよいよ末法に突入したという危機感があります。今何とকাশないと、このまま行けば仏教は消滅してしまうという、そういう危機感が背景にあった。そ

これは曇鸞の時代認識よりも、道綽のほうが、強かったと言えます。これは道綽自身が辿った山西の貧農地帯、廃仏・亡国、隋の興亡といった過酷な遍歴を潜り抜けてきた、道綽であればこそこういう認識に至ったのではないでしょう。道綽の言葉に、「たとひ人天の果報あれども、みな五戒十善のためによくこの報を招く。しかるに持ち得る者は、はなはだ希なり。もし起悪造罪を論ぜば、なんぞ暴風駛雨に異ならんや」というものです。こうして人間として生まれてくることだつて大変なことだ。五戒や十善という人間としての規律を守り、正しい生き方をしたからこそ人間として生まれてくることのできたのである。しかし現代の人々は、この五戒・十善を持つことと自体が非常に困難である。それに対して悪を造つたり罪を造つたりすることは、荒れ狂う大風の如く、豪雨のごとく、毎日のように次から次へと起こつてくると論ず。道綽の引用する疑經の中に、有名な『淨度三昧經』があります。

「一人一日のうちに八億四千の念あり、念々の所作、皆三悪の業なり」という。私たちが一日に造るいろんな思い、今このことを考えたと思えば、次また別のことを考える。一日のうちに八億四千の数限りないことを私たちは考える訳ですね。その中にはこの前の東日本大震災で被災された方のことを考えることもあるし、家族のことを考えたり、仕事のことを考えたり色々します。いろんな思いを持つわけですが、それは全て、一つ一つの念は、みな私達が地獄や餓鬼や畜生といった苦しみの世界に生まれる原因となつていくことです。そういう受け方なんです。ね。わたくし自身反省してみますと本当に善いことはできません。その反対に悪いというか、善くないことを考えたり、欲深いことを思つたり、腹を立てたりの毎日です。日常茶飯事です。こういうふうに言われるとですね、本当にそうだと思います。日々、地獄行きの日暮しです。ありのままの自分というのですね、反省すればやはりこういうふうな受け取らざるを得ないのではないかと思ひます。

「一切衆生、皆仏性あり」これは『涅槃經』の強調するところです。みんな仏性を持つている。「遠劫よりこの

かた多仏に値い奉るべし」と。仏性を持ちながら、しかもたくさんの仏縁に恵まれ、悟るチャンスがありながら、現在まだこうして悟れないで人間に生まれ、輪廻転生の世界にさまよい続けているという。仏性があれば、しかもたくさんの仏に巡り会うチャンスがあれば、もうこの輪廻の世界から離れていて当然であるのに、現実にはそこから抜け出していないと告白する、これが二番目の「約時被機」ということになります。そういう自覚に立てばこそ、早く、一刻も早く浄土往生の信仰を持って、その道に邁進すべきであるという「勸信求往」ということにもなり、また、「念仏三昧」という具体的な実践方法に展開するのです。

次にレジユメの三番目です。『安楽集』に引用される疑経經典です。『安楽集』には実に多くの經典が引用されています。道綽自身がこの浄土の信仰を勧めるにあたっては、經典、論書を根拠に勧めておられるということです。『安楽集』の中から經典とか論書の引用文を差し引いたらほとんど残らないんです。ですからまさに安楽「集」なんです。そういう浄土往生を勧めるための經文とか論文の文集と申しますか、要文集という性格を持ったものです。山本仏骨さんによると、四五經一一六文、九論三積四四文が引かれているということです。その中經文では『無量寿經』が一番多く、『涅槃經』『華嚴經』『維摩經』こういった經典も引かれています。論釈では『大智度論』が最も多く、次いで『讚阿弥陀仏偈』、それから『論註』。ご承知のように『大智度論』は仏教の權威です。百科事典のようなものです。それからこの『讚阿弥陀仏偈』と『論註』は、これは先程から申し上げておりますように曇鸞の著作です。『論註』の浄土教義で重要なものは『安楽集』に引用されております。それともう一つは『讚阿弥陀仏偈』です。これは阿弥陀仏・浄土を讚える偈文です。讚歌なんです。『安楽集』には、要所要所に引かれているんです。道綽が一般の人々に、今まで浄土教に関心がなかった人に興味を寄せても

らうという配慮があつたのではないかと思ひます。讃歌をとくに口ずさみ浄土への信仰を深め、あるいは確立するという事ではないかと思ひます。

『安樂集』に引用されている疑經には、『十方随願往生經』。これは『灌頂經』という經典の第十一卷に相当するものです。それから『五苦章句經』。そして三番目が『目連所問經』、四番目が『惟無三昧經』。それから『菩薩瓔珞本業經』。六番目が『須弥四域經』、七番目が、後で申し上げます、『五王經』です。『安樂集』では『五王經』とは書かれていません。「經に曰く」とあるだけで、何經かわからないですけれども、後世の人が『五王經』と決めたものです。八番目が『淨度菩薩經』、これは『淨度三昧經』とも言ひます。『安樂集』では『淨度菩薩經』となつております。九番目が『善王皇帝尊經』。十番目が『法句經』。十一番目が『十往生經』。この『十往生經』も色々問題のあるものですが、『山海慧菩薩經』とも申します。この中、最も引用回数が多いのは、『十方随願往生經』であります。

疑經研究は、矢吹慶輝、望月信亨、牧田諦亮、柴田泰、大内文雄といった方々の研究成果がございます。もつと他にもあるかもしれませんが、わたくしが知っておりますのはこのようなものです。ことに牧田諦亮先生の『疑經研究』。これは一九七六年刊行の大著です。牧田先生は疑經に関して「經典編纂者の見解から名づけられた偽經とよい疑經という」。最初の「ギキョウ」は偽經（にせきょう）ということですね。經典の名前を借りて、實際は翻訳された經典でないわけですから、偽装された經典ということですね。それから、もう一つの、疑いがあるというのは、どうもこれは翻訳經典とは信じられない、内容を検討したり、中にある語句とか表現とかですね。次に「翻訳仏典であるか否かということに基準をおいて、仏教界から排除されたこの種の疑經類については、もとよりそれが成立すべき原因が、当時の仏教界や社会に存在したのである。端的に偽であり疑であるとして排除されるべきで

はない」と、述べておられます。牧田先生はそういう中国撰述經典、仏教学者が好んだ經典ではなくて、まさに一般の庶民に仏教が定着する、土着する過程において発生したことを強調しておられます。わたくしも、やっぱり仏教が中国に根付くということは、仏教学者だけが論争するだけじゃなくて、一般の人たちの生活の中に仏教が浸透していく、そういう過程においては当然そういうものが、仏教本来の立場からいえば不純なものかも知れませんが、誤りかも知れませんが、そういうものに我々は仏教への近付きをするわけですね。

たとえば、一般の人が思った罪の意識、死んだら地獄に行つて怖い目に遇うとか、あるいは念仏を称えたら長生きできるとか、念仏を称えることによつて寿命が伸びるとか、そういう現世利益的な面が一般の人たちには非常に強い、「疑經」にはそういうものが反映していると、考えられるのではないかと思います。

こうした中国撰述經典こそが生きた仏教、仏教が中国に定着する実態を示すものと考えられる。少なくとも道綽においては疑經典という意識はなかった。これはもうはつきりしています。

道綽は末法の濁世に翻弄され苦惱する一般の人々に往生淨土の法門を勧めるために『無量壽經』や『觀經』、そして『阿彌陀經』といった淨土を代表する經典と對等に「疑經」を用いておられます。仏教が中国に根付いた一端をこの疑經は示すのではないかと思います。道綽が引用する『十方隨願往生經』には亡者の追善、それから中陰思想による現身の予修は家族制度を基盤とする中国社会に合致するものです。また『五苦章句經』には父母に孝を尽くすという儒教の孝倫理が反映しています。中国社会は孝の社会とも言われます。そういうふうなものは自然に中国人の中に染み渡つていくというか、体にあるわけですから、そういうことを強調する内容が經典の中に見られたら、もうそれだけで中国人にとっては親しみを感じるわけです。そのことを一つのいとぐちに仏教が中国に受け入れられていったのではないかと思います。

それから、もう一つの特徴としましては、『目連所問經』とか『法句經』とか『譬喻經』などが引かれているのですが、これらには同名の真經がある訳です。だれもが知っているような。著名な經典名を用いた疑經が作られているということ。つまり真經と混同するような。これこそ偽装になる訳ですが、看板だけはその名前を付けて中身は違うというですね。だけどこれも一つの特徴というか、そういうものも見られるということでございます。

レジュメの四番に行きます。中国固有の思想との融合ということ。少しは申し上げてきたんですけども、大藏經の中には疑經でありながら真經とされるものがあります。これは現代、いろんな大藏經というものの、具体的に言えば、たとえば『大正新脩大藏經』といわれる、一〇〇巻ほどありますが、この『大正新脩大藏經』の中にも疑經が入っております。また反対のケースもあるんですね。だからそれは、經典編纂者の恣意といえますか、評価によつて、この經典が本当に釈尊の教え真經であるのか、判断されるのです。これからご紹介する、『五王經』というのはまさにそうなんです。この『五王經』は、隋の『法經錄』から真經としての扱いがされてきました。だからもちろん今の『大正新脩大藏經』にもございますし、宋版の『大藏經』にも入ってるんです。ところでこの『五王經』というのは『安樂集』では「經に曰く」と書いてあるだけなんです。何經かわからないんですよ。『五王經』であるのを見つけたのは誰かと言うとですね、良忠（一一九九—一二八七）さんなんですよ。良忠というのはやっぱりすごい人なんです。だけど、なんで良忠がわかつたかというところ、それは大藏經に編入されていたからなんです。宋版の大藏經が日本に伝わってますから、検索しようとするればですね、努力すれば見出せた。ところが、先ほど申しました、疑經と認定されたものは、大藏經の中から排除されるわけです。排除されたらですね、もうやっぱり消滅する訳です。それが一部、敦煌の写經に残存しているわけですね。僻地というか、離れたところに。中原では失われたものが、一部残っているものがあります。それから、『安樂集』とか『經律異相』などの文献に引用されて

いるものです。この『安樂集』には、他に全く引用されていない、どこにもないものもあるんです。全然痕跡のないものですね。ですから資料としては、非常に価値があるという訳です。

『安樂集』第九大門に引用される『五王経』であります。道緯は浄土と娑婆、二土の苦楽の比較をしています。当然この世は苦しいところである、それに対して極楽は幸せなところであると、楽しいところであると。だから浄土へ行きましょうということですね。そういうことを明かしている訳です。それからもう一つは、娑婆の寿命と極楽の寿命の違いですね。二土の寿命を比較して浄土への往生を勧める訳ですが、その材料にこの『五王経』が利用されているのです。この二土の寿命の長短を明す所に用いられています。ごめんなさい、私先ほど何経とは書いてないと言いましたが、書いてないのと違うんです、『浄度菩薩経』に云によるに」と書いてあるんです。『浄度菩薩経』に云によるに」として実はこの『五王経』の文が引かれているのです。しかし『浄度菩薩経』というのはですね、實際存在しないのです。『浄度菩薩経』に云によるに」として二つの文が引用されている最初の文が『五王経』なんです。内容はですね、「人寿百歳なるも、夜その半ばを消す。すなはちこれ五十年を滅却す。五十年のうちにつきて、十五以来ははまだ善悪を知らず、八十以去は昏耄虚劣なり、ゆえに老苦を受く。これよりほかはただ十五年あるあり。中において、外にはすなはち王官逼迫して長征遠防し、あるいは繋がれて牢獄にあり、内はすなはち門戸の吉凶、衆事に牽き纏われ、營營けいけいしじゆど忙忙としてつねに求むるに足らず」と。無常迅速と申しますか、一生というのはあつという間に過ぎて行くんだという。しかもその人生というのは、楽しいことは本当に少なく、次から次へと悩み、苦しみ、そういうものがいっぱい訪れてくるということを端的に言ってるんですね。「人寿百歳なるも、夜その半ばを消す」というのはですね、これが中国の莊子とか列子、抱朴子などに頻繁に見られる文節です。だから、いわば中国人の人生観といえますか、考え方を反映するものだと思うんです。それがこの『五王経』がそ

つくり丸々採用していると、それが結論なんです。要は、人間、長生きしても百年やと、大まかに言えば、長生きしても百年、今は百十何歳まで生きてる人もおられますが、大まかに言えば、最高百年やと。中にはお腹の中で生まれる前に死んでしまう子もいる。もちろん五歳とか十歳とかで亡くなる人もたくさんいます。譬え百年生きても半分は夜やないか、ほんなら五十年差し引かないかと。百年生きたとしても夜は寝てますから、何もしてない。そしたら五十年しかないと。しかも十五歳ぐらいまではまだ物心がつきませんから、判断力もない。そしたらまたそこから十五年引かないかと。それからまた八十五歳済んだら、いかに有能な人といってもですね、呆けてきまず。耳が聞こえなくなる。生きてるだけで、いろんなところがもうろくしてきます。そしたらまた十五年引かないかん。そしたら譬え百年生きたとしても、大まかに言うたら十年ぐらいしか生きてないということなんです。譬え百年生きたとしてもですよ。ましてや二十年ぐらいしか生きてない人やつたら、ほんまに少ないですね。そういうことを説く經典なんです。本当、言われてみればそうだと思います。あつと言う間です。私は先程紹介いただきましたように、七十になります、自分ではまだ二十代のつもりでいたんですけどね、ど厚かましいけれど、あつと言う間ですよ。本当に、何してたんやろなって。あと十年ぐらい生きるかなと思ってますが、それもわかりません。「光陰矢の如し」と言いますが、あつと言う間ですね。あつと言う間です。

この『五王経』は隋の『法経録』以来真経と見なされ、開元十八年（七三〇年）に編纂された『開元釈教録』に入蔵されたことにより宋版大蔵経にも真経として扱われてきたものです。決して疑経とは評価されていないんですよ。短い經典で、四紙か五紙です。『大正新脩大蔵経』では三ページぐらいしかないとします。内容も非常に単純なので一見、疑経とわかるようなものです。内容からして、翻訳經典ではなく、中国人が撰述した疑經典であることは明らかです。

『五王経』は、五人の王様が主人公で、その中に一人だけ菩薩の行を積む、仏道修行した王様がいます。その王様と他の四人の王様の行動が主なるテーマになってるんです。五王のために説かれた「八苦」が説かれてます。いかに人生というのは苦しみばかりかということをやす。特にこの今の「人寿百歳」というところは、一番最後の「憂悲悩苦」を説くところです。そこには人間が一生において数えきれない苦に遭遇することを詳細に説いています。人が生まれて、長寿の者は百歳にも至るが、短命のものは胎内で、お母さんのお腹の中で亡くなることもあり、譬え百歳まで生きたとしても半分は夜であるから、五十年は差し引かなくてはならない。さらに酒に酔ったり病気になるれば、人として十分な活動もできない。したがってまた五歳減じなければならぬ。また十五歳までは愚痴で礼儀もわきまえない。また八十を過ぎれば老い鈍り無智になると。これら四十年を差し引くと僅か十歳の寿命ということになる。その十歳においても戦争とか天災地変とか病気とか家族に様々な困難が訪れてくる訳ですから、毎日毎日そういうことに悩まされ翻弄されなければならない。気が付いたらもう人生は終わりという。

「人寿百歳なるも、夜その半ばを消す」という思想は中国の古典である『莊子』雑篇盜跖篇、『列子』の楊朱篇、『抱朴子』の内篇勤求などに見られます。『五王経』は梁の僧祐の『出三藏記集』編纂から『法経録』成立の約八十年の間に編纂されたものと考えられる。わたくしはこれらの中『列子』の内容が一番びつたしくるんじゃないかと考えています。

『列子』楊朱篇に、百年は人間の寿命の極限であり、百歳まで生きるものは千人に一人もいない、譬え百歳まで生きたとしても、無心の幼年期やもうろくした老年期がその半ばを占める。その残りの半分は睡眠に取られてしまい、さらにその残りの半分は心配事や労苦で費やされる。とすれば、あとに残るのは僅かに十数年に過ぎない。しかもこのわずかな期間のうち、心から楽しみ満足できるのはどれほどであろうか。そもそも人間はこの世に生まれ、

何をなし何を樂しみとするのか。美しい服を着たり、綺麗な女性と交際したり、歌舞に興じること以外に何の樂しみがあろうかと、人間の欲望を肯定するものです。もし道徳や法律に縛られてこの樂しみを果たすことができなければ牢獄に閉じ込められた囚人と何の変わる場所があろうか。これは『列子』の内容です。太古の人は人生がつかの間のことであると知っていたから、心の赴くままに、自然に背くことをしなかつた。列子は莊子の流れを汲む老莊の無為自然の立場です。どんな道徳的な生活をした人でも、どんなに不道徳な犯罪を犯した人でも死んだら等しく骨になってしまふ。死後の名声などに心を引かれて、生きている間の樂しみを犠牲にすることは愚かしいことであるとする。この楊朱篇はすべての欲望を無差別に肯定するものではありません。壽命・名声・地位・財貨の四つは運命に支配されるものですから、これに対する欲望を満足させることは不可能です。人間にとって真に本性的な欲望は、大きな家に住む、綺麗な服を着たい、美味しい物を食べたい、綺麗な女性と交わりたいということです。これは誰でも一応、心の中では思っております。

『五王経』にも国境を接する仲良しの五人の王様がいて、そのうちの一番大きな国の王様は普安王といて、仏道に目覚めた王なんです。ところが他の四人の王様は、それこそ樓閣殿堂、鞍馬服飾、好衣美食、美女を妻としたいという世俗的な願望が強い王とされます。それを普安王が何とか説得して仏道に入らせる過程で出てくるものなんです。一方、道綽が『五王経』を引用したのは、一刻も早く浄土に往生することを勧めるのが目的です。道綽が自分の欲望の赴くままに、どうせ人生死んだらみんな骨になるんやから、欲望のまま好きなことをや……、そんなことをおっしゃるはずはないですね。譬え百年生きるとしたって、本当に人間らしい行動ができるのは十年もない。百年という、あれもできるこれでもできる。いっぱいできると思っているけど、それはあつという間に過ぎてしまつて、本当に充実した人間らしい生き方ができるのはほんのつかの間である。だからその時間を無駄にし

てはいけないということなんです。道綽にとっては世俗の願望に執着することより、一刻も早く浄土に往生することを勧めるのが目的であります。中国固有の思想を孕む疑經が自在に利用されるのは、道綽にはそういう意識はなく、仏教が中国に定着していった一つの証拠と考えられるのではないかとということなんです。

『五王經』は疑經にも拘わらず歴代の經録において真經と認定され、つまりこれは翻訳經典と認定された訳です。宋版の大藏經に入藏されたため、良忠の目に止まったのです。同じく疑經である『淨度菩薩經』、これは『淨度三昧經』のことと考えられますが、これは經録編纂者に疑經と判定されたため入藏録から除外され宋版の大藏經にも収録されなかったのであります。したがって良忠は「彼の經末見」とされたものと考えられます。

道綽の『安樂集』には非常に特異な教えがございませう。いまの衆生は釈迦が入滅されて、第四の五百年にあたり、懺悔修福して仏の名号を称えるべきであると主張されています。こういう時代というものが基礎になっています。その上で、根というものを配慮して、この時代と人間の機根そして仏法との相応というのが基礎になっています。その上で、弥陀の淨土は淨土の初門なり、娑婆世界はすなわち穢土の末處なり。すなわちこの娑婆世界と淨土は境界が接しているので、往生に便利だということ。これはだれも言うておられないことです。阿弥陀仏の淨土は淨土の中の入門口だということ、淨土もいっぱいある。阿弥陀仏の淨土は淨土の中では初門である。つまり入門者の淨土だとし、それに対して我々の住んでるこの娑婆世界は、穢土の中では一番勝れた世界という訳です。だからその娑婆と阿弥陀仏の淨土は境界が接しているということなんです。近いというわけです。隣だというわけです。ここは穢土で、淨土にもいっぱいランクがあつて一番往生しやすいという。だから淨土往生を願う人にとつては、また普通の一般人の人達にとつては、西方十万億土と云つたら、もうどこにあるか分からないことになりますね。『無量壽經』によると西方十万億土とあります。十万億も隔てたところへどうやって行くんやと考えられますが、いや、隣なんですよと、解釈す

るのです。一刻も早く往生を願う凡夫にとつてはありがたいことです。

先ほど念仏三昧を、三番目にあげましたが、道綽の念仏三昧の概念は非常に広いように思います。第四大門に念仏三昧のことが示されています。どういう經典が引用されているかと申しますと、『觀經』以外に、『華首經』、『文殊般若經』、『涅槃經』、『般若三昧經』、それから『大智度論』、『華嚴經』、『海龍王經』などを挙げています。全部念仏三昧という概念ですね、括られているように思います。だから非常に範圍が広い。その中に念仏三昧、あるいは觀仏三昧もある。いずれにいたしましても念仏三昧の概念が広いということでございます。だから、おそらくそれを全部許容されていたのではないかと思います。これは念仏三昧の功德が他の三昧の功德に対して大きいことにあります。

それからもう一つだけ、申しあげて終わりにしたいと思えます。極楽浄土が西方にある理由に關してです。我々は詮索できないわけですが、なぜ顔を西に向けて、坐して礼拝し念仏をするのかというと、この私達が住んでいる閻浮提においては日の出るところを生地と名付け、日の没するところを死地とするのです。太陽が没する処を死地とすることにより我々の心といいますか、靈が赴くにあたっては非常に都合がいいという訳ですね。太陽も東から昇つて西に没するし、星とか月も東から出て西に没す。だから自然の摂理に合致していると。そういうことから法藏菩薩は西方に浄土を構えられたのではないかと説明します。それは慈悲の心を持つてされたのではないかと。この世の儀礼にしたがうことなんだと、ごく自然のあり方だと。私も、やっぱり夕方太陽が没するところにやがて命が赴くというのには納得できます。日の沈む、日没のところを理想とする仏の世界があるという。これは頷けるような気持ちがあります。

それから『須弥四域經』という、これもやっぱり疑經なんですけれども、日月星辰は、阿弥陀仏が造られたので

ある。つまり阿弥陀仏は天地創造の仏であるといいます。真つ暗闇の混沌とした世界であったのを、阿弥陀仏が二人の菩薩を遣わされて、月とか星とか春夏秋冬の四季をお造りになつたんだと。だから太陽が東から西、星が東から西に行くのは、みんな太陽とか星は阿弥陀仏に敬礼するためである。そのようなことも仰っています。

本当に雑駁な講義で、うまくまとめることもできなく申訳ありません。いつもわたくしは授業が終わってから、あれも言いたかった、これも言いたかったと思つて、ずっと四十年間それを繰り返してきました。今日もまたそういう結果に終わりました。大変失礼いたしました。今日はみなさま方こうして新年のお忙しい時にもかかわらず、私の最終講義にお集まりいただきまして、ご静聴いただきましたこと本当に心からお礼申し上げます。また今後ともどこかでお会いすることがあるかもしれません、よろしく願いいたします。どうもありがとうございます。